

玉曆頒春天地新。瞳々旭日入佳辰。窃期今歲開生面。椒酒一杯吐句頻。

設成錄二

十時斬魔

北海鯤鵬化豈難。運機未至修雲翰。叢間斥鷃請休笑。一擊三千起怒瀾。
蓬萊求藥幾人還。身寄蜉蝣天地間。知己元來百年後。唯埋骸骨在名山。

稼堂先生曰 何等抱負

批評

再び『文學上に於ける現時の國家主義』を讀む

眠天窟主人

楮村學人健腕を振うて大に『文學上に於ける現時の國家主義』を論ずるや、余自ら揣らず、敢て所信を據へて疑惑を質す所ありき。不敏素より深遠高妙なる學人の立論を解する能はざり、去を恐る、豈敢て之を批評したりといはんや。學人の懇切なる、更に十有餘頁に亘れる長篇を草し、余輩の『妄を辯して立論の主意を明にし』、余輩の爲に諄々教訓を垂れたまひき。讀誦一過、先づ其の用辭の奇警なるに驚き、其議論の精妙なるに惘れ、杲然として言はん所を知らず。殊に其議論の飽まで叱咤的なるを見、通篇の用語決して車夫馬丁の惡言の如くならざるを信じ、翻て余が禮に嫻はざる過言を顧み來れば、忸怩として自ら禁する能はざるものあり。余輩既に立論の主意に於て疑ふ、冀くば更に前の楮村學人が議論に對して、敢て鄙見を吐露することを得せしめよ。

第一 文學と國家と

今日の文學はすべて國民的文學ならざるべからず、國民的文學は國家あり國民ありて後に生ずるもの也。國家既に成り、國民既に存する今日に方り、其文學の趨勢を論ずる、宜しく眼を此間に注がざるべからず。國家といふ語未だ明晰なる定義なしと雖も、若しフリーマンが解釋に隨ひ、地球の或表面に定住し、同一の國語習慣の下に在りて、同一の政府を奉ずるものを國民となさば、國家成立以前既に文學を生じたることは、三尺の童兒も尙は能く之を知る。余は既に言へり、各國に文學あるは世界といふ思想の反響に非ず、各國特有のものあり、各國特有の思想あり、故に各國特有の國民文學あるを要するなり、蓋し是等文學は國家に後れて生ず、斯語を以て國家成立以前に文學なしといふものと爲すこと毋れ。一故に文學と國家とは全然分離し得べきものに非ず、今故らに國家と文學とを根本的に差異あるものとなし、文學が國家成立以前より存在せしといふを以て國民的精神を離るゝことを得べきものとなすものあらば、是れ實に進化の理法を解せざるものといはざる可からず。余が學人の立論に疑惑を抱きし所以のものは、その文學上に於ける國民的精神を排するの點に在りまなり。試に學人自身の論する所を引用せんか。

「何を俗論輩の愚弄といふ、曰く、國民文學の大聲疾呼即ち是なり。」

嗚呼此一語以て左券とするに足る。

余は瞥見的讀出とかいふ遁辭の再ひ要をなすを欲せざるが故に、此に學人が「余輩は決して國民文學の語を排斥するものに非ず」といへる自家撞着の語ありしことを附記せざるべからず。然り、學人は實に斯語を爲せり。然れども、此語の在るが爲に、學人立論の主意は文學上に於ける國民的精神を排

せ。之。も。の。に。非。ず。と。い。ふ。こ。と。を。得。じ。余。ハ。一。句。一。句。を。拾。ひ。出。し。て。學。人。が。議。論。の。撞。着。を。指。摘。す。る。の。要。な。し。是。を。以。て。曩。に。胸。中。の。感。懷。を。吐。露。し。て。疑。惑。を。質。す。に。方。り。て。も。唯。大。体。の。論。旨。に。於。て。首。肯。し。得。ざ。る。所。を。論。ず。る。に。止。ま。り。き。余。は。今。更。に。言。を。費。す。を。欲。せ。ず。然。れ。ど。も。一。應。余。が。意。の。存。す。る。所。を。述。べ。ざ。る。べ。から。ず。要。す。る。に。余。は。學。人。が。國。家。と。文。學。と。を。兩。極。端。の。上。に。立。て。る。も。の。と。し。決。し。て。二。者。の。合。一。を。許。さ。ら。る。に。對。し。文。學。の。國。家。に。離。る。能。は。ざ。る。所。以。を。述。べ。て。聊。か。文。學。の。據。る。所。を。明。に。せ。ん。と。欲。し。たり。き。當。時。窃。に。惟。へ。ら。く。學。人。果。し。て。余。輩。の。蒙。を。啓。く。の。厚。意。あ。ら。ば。必。ず。や。文。學。と。國。家。と。の。兩。極。端。な。る。所。以。を。明。解。せ。大。に。超。越。的。文。學。の。真。髓。を。發。揮。せ。ら。る。こ。と。あ。ら。ん。と。何。ぞ。圖。ら。ん。學。人。の。辯。駁。を。讀。む。に。及。び。徹。頭。徹。尾。責。を。余。輩。の。誤。解。に。歸。し。て。更。に。其。所。謂。立。論。の。本。意。を。明。に。せ。余。輩。の。期。望。を。し。て。空。しく。水。泡。に。歸。せ。し。め。ら。れ。ん。と。は。前。の。楮。村。學。人。は。實。に。言。へ。り。

「理想を踏臺とするは文學なり、現實を基礎とするは國家なり……文學は社會に生れて、社會に超逸し、國家は社會に生れて社會と平行せざる可らず……兩者の根本的差異を有するや此の如し。然り而して此兩極端を合して是を「に」更に彼を此に入れんとする者あらば、誰か其不合理不自然の計畫に呆然一驚を喫せざるものあらんや。」

と。嗚。呼。是。實。に。一。篇。論。旨。の。據。で。立。つ。所。な。り。余。の。誤。解。に。出。づ。る。や。否。か。を。知。ら。ず。と。雖。も。是。れ。實。に。文。學。と。國。家。と。相。涉。る。へ。か。ら。ざ。る。を。論。ず。る。に。非。ず。と。何。ぞ。此。前。提。に。關。し。て。は。余。亦。多。少。の。異。見。な。き。こ。と。能。はず。故。に。文。學。の。國。家。を。離。る。能。はず。國。民。的。精。神。を。去。る。可。か。ら。ざ。る。を。論。ず。る。に。及。び。後。の。楮。村。學。人。は。遽。然。と。去。て。曰。く。

「何人の文學を國家以外に分離せよと云ひたる、何人の國家を離れて文學存すといひたる。」

と。余。は。何。人。の。そ。の。様。に。云。ひ。し。と。も。い。は。じ。學。人。ハ。決。し。て。文。學。を。國。家。以。外。に。分。離。せ。よ。と。も。言。は。ず。國。

家を離れて文學存すとも言はざりき。之か言はざりしを以て立論の主意は全く異れりとはいふこと能はざるべし。試に問ふ兩極端の上に立てる兩極端のものが如何にして相關係すべきか。學人は理想と現實とを以て兩極端なりといへり、然り、學人ハ予固より、理想と現實とを以て極端と極端とに看做したりき』といへり。而して文學と國家との兩極端なるよしは、前に掲ぐる學人の前提中に明言せられき。此の如く兩極端の上に立てる兩極端のものが、果して如何なる方法により相渉ることを得べきものなるか。余は素より後の學人が『何を苦むでか關係せずなど云はびや』といふの道理に合へるを認むると共に、前の學人が如何なる關係を見出したまふかを怪まざるを得ず。

尙驚くべきは後の學人が理想と現實との關係に就きていへる事なり。學人ハ文學の基礎を以て理想となし、國家の踏臺を以て現實となし、之を論據となして兩者の根本的差異を斷じぬ。是に於て、孤松生も余も共に現實と理想との關係如何を疑ひぬ。孤松生の意ハ余固より知らず、然れども、余が見る所を以てすれば、假に學人の語として正確疑ふべからざるものも、尙現實と理想との關係を論せざる限りハ、未だ直に兩極端なるが故に合一すべからずと斷定すること能はざらむ。然るに學人は輕々斷言して曰く『足下等は何の要ありてか特更らに理想と現實との關係を喋々せんとするぞ』と。理想と現實との關係にして明ならずんば、各之を基礎とする文學と國家との關係如何ぞ斷ずることを得む。前の學人は此兩者を以て兩極端といふ、後の學人は此兩者を以て關係ありといふ。姑らく之を解釋して、兩極端ながら關係ありといふとど做し、さて何故に文學には理想を配し、國家には現實を配したるかを考察せよ。吾人不敏、解すること能はざるものあり。

國家が現實を基礎とすといふ、可なり。文學は何如にして理想を踏臺とするか。所謂理想とはイデア

ルの義なり、イデアルを踏臺とするは何に向ふて趨く爲めか。理想を踏臺とて理想に向ふは、猶學人の例に引ける龍田山の巔を踏臺として龍田山の巔に向ふといはんが如し。もし文學がフアンタジイを踏臺とすといふの意ならば、稍其意義を解するを得べしといへども、理想といふ語は學人が後に用ふる所によりても、其イデアルといふ義に外ならざるを見る。思ふに此後に於ける學人の本意はフアンタジイといふに在りて、最初の學人が理想といひしは、即ち余が誤解せる所ならん、然らば則ち、學人は更に余が『妄を辯して立論の本意を明にせらるゝことあるべし、余は實に最初の學人が所論に就きて論じたるの大早計なりしを悔ゆ、故如何といふに、學人の本意は後に至らざれば知る可からざるものあればなり。

兎に角文學は或物を踏臺とするに相違なし、然らば其或物とは何ぞ、もし學人の言ふ如き、理想といふものに非ずとせば、學人の議論は根底に於て倒れざる可からず。

文學とは何物ぞや、言辭によりて發揮せらるゝ人の思想に非ずや（是れを以て定義となす毋れ）Die Darstellung der Ideen vermittelt der Sprache、されば此に究むべきは人の思想と言辭といふものは如何なるものぞといふことなり。凡そ人は常に無極の理想に向つて走らんとす、蓋し理想は目的とし能ふものにして踏臺とする能はざるものなり。文學は實に此理想を啓示するものにして、はた是を以て目的とするものなり。未だ初より理想を踏臺として立つこと能はざるなり、故如何といふに是れ爲し得べきことに非ざれば也、理想といふもの、性質既にしかなし得べきものに非ざれば也。學人は曰く

文學は差別的のものに非ざりて、平等的のものなり。國家は即ち然らず、平等的のものにあらずして、差別的のものなり。予も文學の踏臺を以て理想とて、國家の基礎を以て現實なりませらば、これ等の道理を擔言するにありき。文學一轉して差別的と

なるの曉は偉大崇高の希望星既に消滅したる時なり。文學の特質根本何處に於て見ん。」
ついで又曰く、

「文學を平等的と云ふは最高の文學に就て云ふなり。その位置或は差別の境に彷徨するものあらむ。然れども是れ早晚進んで平等的なるものにして未だ俄に是を以て文學と云ふ可らずなごいはんは素より不可なり。予は信ず日本文學の大半は多少差別的には非ざるが、然れども、余は斷つて日本文學は文學に非ざらざるを擯斥せんを欲す。」

と。是に至りて余は感はざることを能はず。幸に前後の二文を精細に對讀せよ、文學の特質根本を欲けるものにして尙文學といひ得べくんば、文學の特質根本といふものは、文學たるに於て何等の要もなきものなり、切言すれば文學の特質根本たるの價値なきものなり。斯の如き自家撞着に陥りし所以の者は、畢竟所謂特質根本といふもの、瞬時にえて、文學の本質を解すること明ならざりしに由らずんばあらず。

漫に平等といひ、差別といふを休めよ。この語の深遠なる決して淺薄に使用すべからず。蓋し平等とは絶對無窮の唯一窮極なり、差別とは待對有限の雜多現象なり。フアンタジイなるが故に平等なりとはなすこと能はず、自然界の現象ならぬが故に平等なりとはなすこと能はず、形而上界なるが故に平等なりとはなすこと能はず。文學が形而上的なるは論なし、有形的現象ならぬことは論なし。さればとて差別的のものに非ずして平等的のものなりとはいふべからず。文學の絶對的、無窮的、唯一的、窮極的のものならぬことは其時代によりて變じ、境遇によりて異なるあるを見て知るに足れり。而して今學人は漫然平等のものなりと論斷之去る。嗚呼學人の所謂平等とは變化を許さ、推移を許すの義なるか。學人或は言はん、予が所謂平等的といふは最高の文學に就て言ふのみと、之かれども學人の

『文學一轉して差別的となるの曉は、文學の特質根本は何の處にか覓めん』といひしことを記せざるべからず。更に進んで之をいへば、すべての文學は早晚進んで平等的となるといへる學人の斷言は、文學夫自身が遂には絶對的唯一窮極となるといふの意に於て、文學は遂に哲學者に非ざれば解悟すべからざるものとならむ。是れ實に深遠の議論といふべし。

余は今平等といふことを論きたり、恐らくは學人或は平等と平等的とは『猶徳利と酒との如し』といへる譬喩によりて此問題を逸し去らんか。よし、煩を忍むで尙一言を加へん、平等に非ずして平等的のものあることなし、平等は唯一なり、絶對なり、比較せらるゝものに平等といふものなし。差別的ならぬによりて平等的なり、待對的ならぬによりて絶對的なり、二は一に近きを以て一的なりとはいふべからず、唯一は實に唯一の外に何物をも許さぬなり。是を以てすべて比較し得べきものに平等的といふことなきは明なるとす。斯る哲學的議論は學人が或は陳腐に過ぐと爲すものならむ。まかほあれど、論じて此に至れば文學が平等的ならぬものたることは、自ら明なることにして、學人が議論の自殺となりし所以のものも、畢竟平等差別の何たるを明にせざりしに歸せざるべからざるを知るに足らむ。唯こゝに附記すべきは、最高の文學は如何といふことなり。蓋し眞義に於ける最高のものに絶對的唯一のものに非ざるはなし、是を以て推せば、最高なる理想的國家も亦平等的のものと言ふことを得べく、獨り文學のみに限らざるを知る也。まかほども、學人が『文學は差別的にあらざりして平等的のものなり』といへるは、素より言を待たずして誤謬なりといふを得べきなり。こゝに言へる最高なる理想的國家が平等的なりといへることは、差別界に於ける國家を推しては、容易に理會し難きことあらむ、是れ平等的といふことの餘に高尚なるに由ると雖も、理に於ては實に然る也。國家が此に至

り得るや否やは問題に属す、故に余はこれを能ふとは云はず、否寧ろ能はじと言はんと欲す。學人が所謂最高の文學といへるは斯る眞義に於ける最高のものに非ず、すべて差別的の文學が早晚進んで平等的文學となるといふに由りて見るも、其義の淺薄なるを知るに足らん。されば學人が最高の文學は平等的なりといへるも、學人所用の意義に於ては、尙誤謬といはざるべからざる也。更に之を言へば、すべての文學が最高の文學となるといふこと、最高の眞義によりては、到底解すべからざる言に過ぎざればなり。

以上余ハ學人の文學は理想を踏臺とすといひ、文學は平等的のものなりといへるに對して、其然らざる所以を論じたり。今翻て余が鄙見を陳し、人の思想と、言辞とに就きて辯明し、尙進んで文學と國家とに關して陳述し、學人と余と、根底に於て如何なる異見を有するかを明にすべし。

いふ迄もなく人は現象界に棲息するものなり、時間と空間とに制せられて、あらゆる關係の下に生活するものなり、されば人は思想の自由を有すと雖も、まかも遂に動物的形骸を脱すること能はず。余今心身の關係を論じて深遠なる哲學的議論を云々せんと企つるを欲せず。まかれども、人が遂に差別界以上に出づることの難きことを以て、其思想が如何にしても絶對的窮極域に達するの難きを述べて已まむ。予は人が平等を觀念せんとするの傾向あるを認め、古來の哲學者が、專念一意明解を得んと欲するものは即ち是なり。まかれども、人既に差別界を離るゝ能はず、故に人の思想夫自身も亦未だ平等的なること能はざるは、古來の思想界を點檢するものゝ、必ず發見する所ならむ。所謂ヘブライの思潮といひ、グリーキの思潮といひ、流れ〱て思想海に波瀾を横生せしもの、いづれか其特異の形跡を有せざる。既に特異の形跡を有する所以のものは、或は先天的性格に享け、或は自然的境遇

に感したるの致す所にして、究竟するに、人が差別界を離れざるによりて其思想も亦差別的ならざるを得ざるに由るに非ずや。今學人が言へる、

「それ文學の中心は人間なり、人間を描寫するは文學の目的なり。一國に特有せる人間にして世界に適應すべからざる人間を描寫せば、是世界文學なる能はぜ。」

と、いふ語を取りて文學の平等的なることの論証となさば、人は即ち差別的のものに非ずと言はざるべからず。余は敢て一國に特有せる人間を描寫せざるべからずといはず、一是に關しては後に論ずる所あるべし。然れども、一國をも離れたる人間の思想すべからざることは言を疎たずして明なる所ならむ。こは寧ろ文學の主題に關することなるが故に、今深く言はじ。唯文學上の人間が、或點に於て世界に適應すべきが故に、文學を平等的なりとなすは、文學の性質を論ずるに於て、余が服すること能はざる所なるのみ。翻て余が言ふ所を約言すれば、文學の根源たる思想は遂に差別的なりといふに歸着する也。

言辭の差別的なることは、今新しく論ずるの要なかるべし。此差別的の言辭を藉りて、彼の差別的なる思想を表出す、いかんぞ差別的ならざるを得んや。而して文學ハ即ち是のみ、是に至りてハ余は文學を以て平等的なりといふの遂に解し難きを苦む也。此に言へる差別的の字は、斷るまでもなく、國民的、あるハ、國家的といふ意義にはわらず、然れども國民的、あるハ、國家的といふ、既に差別的なるものなり。而して余が今に至るまで屑々として此議論を行りしものは、究竟學人が文學を平等的なりといへるに對して服する能はざる所以を述ぶるに在ること。蓋し學人は平等的ならざるべからざるよしを保持し、之を以て文學の特質根本と云へ言ふに由りて見れば、其國民文學を排するの意は、一假

令學人は國民文學を排斥せずといふども、又文學と國家とを分離せよとはいはずといふども、明に觀ることを得べきものあるが故に、學人が前提とせる所に就きて、敢て疑を挾むに外ならず。蓋し國民文學を拒否せずんば、文學は平等的なる能はず、文學と國家と分離せざる限りは、文學は平等的なる能はず、若し文學の特質根本ハ平等的なるにありといひ、國民文學は文學に非ず、國家と分離せざる文學は文學に非ず。余が學人を以て『國民文學を拒否するを如何せん』といひまもの、豈猥りに學人を誣ゆるものならんや。學人は『日本文學は文學に非ずといふものを擯斥せんと欲す』と斷られたれども、文學の特質根本を平等的なるに在りといへる學人の前提に對しては、實に撞着せる語にして、是學人本來の眞意に非ざるべきなり。

斯の如く論を來れば、學人の所謂文學は、誠に根底を何處に有するかを解するに苦まざるを得ず、それも其筈なり、理想を踏台とすといふこと既に解し難ければ。余は信ず、文學の根本とする所は人の思想なり、理想も亦一の思想なりといへども、そハ決して踏台となし得べきものに非ざることは、既に前に論じたるが如し。而して余が思想といふものは、現實に關して極端の地位を占むるものに非ず、現實と密接なる關係を有するものなり。一步を進めて之をいへば、現實やがてその思想の踏台となるべきものたる也。之を學人の議論に比するに、學人は理想を以て踏台とし、現實と理想とは兩極端なりとなすも、余は現實を踏台とせる思想を以て根本となす。學人は其結論中に於て、余を目して『與に談すべし、議すべし』となし、『其大本に於て合せり、予ハ計らずも知己を得たるを喜ぶ』とのたまひたるを見て、御見識の高さと、わが如き鈍物を顧みたまふ御親切に對し、冥加至極と謝せざるべからざれども、此に謹みて學人と余とは大本に於て全く相容れざることを斷言せざるを得ず。

さて文學と國家との關係は如何。余は今此大題目に關して詳説するを得ず、貴重なる紙土を費すこと夥多に過ぎざるを恐るればなり。玄かれども、簡單に之を言へば、文學が國家に感勢を興へることあり、國家が文學に影響することありとされど、國家成立以後の文學は全く國家的思想の感勢を被らざるを得ず、これ猶宗教が國家の特性を帯びるに至ると一般にして、進化した自然の理法なりと謂ふ可也。國家的思想とは政治上の思想のみに非ず、學人は得々として政教分離論を唱へ、國家と文學とを合一すべからず、余をして換言せしむれば國家と文學とは分離すべしといへるも、政教分離論の意と豈に異ならんや」と論せらる。嗚呼國家と、單に政治的の義のみならんや。政權を宗教上に濫用すべからざることは、學人の語を待たずして明なる所、玄かれども、同時に宗教の國民的ならざるべからざるは、亦余が辯を費さずして明なる所、學人も亦實に之を是認せざる能はざるに非ずや。余は政文合一論を唱ふるに非ず。熟ら學人の議論を反覆するに、國家と文學とは合一すべからずといふ、是れ國家と分離せよといふに非ず。蓋し合一せずして同時に分離せざることを得るものありや。強て之を後の學人が解する如くせば、學人は國家と政治とを混同せるなり、前の學人は政治と文學との關係をば少しも論せざりき、唯國家と文學との兩極端にして合一すべからざるを論じたるのみ、而して後の學人は、是れ猶政教分離論の如しといふ。果して然らば國家と政治とは同一物なるのみ、さらば國民的精神とは政治的精神なるのみ。何を夫れ然らんや。敢て後の學人に問ふ、前の學人は果して何如なる點に於て政治と文學との分離論を唱へしが。後の學人鄙野なる言語を以て叙して曰く、

「計らざりき、予文學の根本は國家の根本と相異なれり、故に合一すべからずと云ふや。應報觀面、亦面一本喰はせ玉ふて、國家

以外何處に文學あるかき怒鳴り玉はんとは何事か。此の如き論議は、余が合一すべからずといひ、毫も文學と政治と合一すべからずと

と。眞に然り、前の學人は文學と國家と合一すべからずといひ、毫も文學と政治と合一すべからずといひ、故に余は「敢て問ふ國家を離るゝ文學ありやなしや、あり得べきやあり得可らざるや」といひぬ。計らざりき後の學人は予は文學を國家より遠ざけよといはず、政治と文學とを分離せよといひたるの如く述べられんとは。前の學人の論と後の學人の論とは、此點に於て全く相異れり、前の余が服せずして疑を陳したるもの、後のは余が論と殆んど異なるもの、いづれか眞正の楮村學人の議論とや見るべき。後の學人は國家を政治と解して前の學人の議論を辯護す、其當らざるは言ふまでもなし、學人問ふて曰く「此兩極端に文學と國家とを合して是を一にし、更に彼を是に入れんとする者ならば誰ら其不合理不自然の計畫に驚かざらむといふは、文學は國家以外に獨立すとの意味に取ら得べきか」と。曰く素より然り、果して然らざれば後の學人が解する如く、之を以て文學は政治以外に獨立すとの意味に取り得べきか。更に問ふ、國家と文學とは合一すべからずと云ふは政教分離論の如く政治と文學とは合一すべからずとの意味に取り得べきか。

宗教の國民的ならざるべからざるはいふまでもなま。今日基督教徒の一派が、大に日本的基督教を説くものあるは、蓋し舶來的宗教の不道理なるを看破したるによる也。余が文學の國家を離るべからざるを論じて、前の楮村學人に質したるも、殆ど之と全一の理由あるに由る也。余は一言も政文分離論を攻撃したることなま。後の學人は何が故に政教分離論を云々するぞ、是れ國家と政治とを同一物とせざる限は、寸毫も前の學人及び余が議論と關係する所なし。若し政治と國家とを同一物とするの説あらば、余は謹みて其示教を仰がんと欲す。國家は素より同一の政府を奉ず、故に或點に於て政治の

發現なること、言を誤たず、まかれども、歴史、境遇、遺傳、習俗、別に政治以外のものありて存す。所謂政教分離論とは、政權を宗教に及ぶるの謂なり、國家と宗教と合一すべからずとの謂にはあらざるなり。學人の所謂「國家と文學とは合一すべからず」といふ、政教分離論の意と異ならんやといへるは、全く當らざるの言なり。余をして言はしめば、宗教は亦國家と分離すべからざること文學と異ならざる也。

之を要するに、余は飽までも文學と國家の分離すべからざるを主張し、前の學人が國家と文學とを以て兩極端となせるに反對す。人は國家を離る、能はず、人の思想は國民的特色を去る能はず、亦決して離去すべからざるを信すればなり。夫國家を離れ國民的特色を去れる文學は根底なき文學なり、不健全なる文學なり、宜しく極力排斥せざるべからず。漫に保守といひ、排外といふ、唯其言ふがまゝに一任せん。斯の如き輩は、自家立脚の地を知らざるものゝみ、余は猪村學人の決して此儕輩に非ざるを信する也。

(未完)

猪村學人の答辯を讀む

孤松生

生は第四十號の誌上に於て、猪村學人の論文に就て予の感せる所を記し、聊う解する能はざりし所を質しき。然るに學人の第四十一號に於て、晚天窟主人の批評に答ふると同時に、生の批評に對して反駁する所あり。生の喜悅何ものか之に加へん。生は深く學人の好意に對えて、謝する所なかるべからず。學人はそも生を以て共に談するに足ると爲すが。

生は喜悅を以て學人の答ふる所を讀まんとせり。然れども、生は學人が余りに嘲弄的、文字を臚列せら